

幼児における友だちの情動特性の理解 — 葛藤場面及び共感場面における情動予測 —

原 孝 成

Preschoolers' Understanding of Their Friends' Emotional Characteristics: Prediction of Other's Emotional Reactions in Conflicting and Empathetic Situations.

Takaaki HARA

Abstract

The present paper examined preschool children's understanding of their friends' emotional characteristics. In Study 1, twenty-nine 6-year-old children were asked their <friends> and <acquaintances> emotional reactions in various situations, such as conflicting (accident and hostility) situations. There were no meaningful differences in the manner of prediction of the subjects' peers whether the peer were <friends> or <acquaintances>. Then in Study 2 subjects were asked their <friends> and <acquaintances> emotional reactions in empathetic (positive and negative) situations. In positive situations, the subjects showed no meaningful differences whether peers were <friends> or <acquaintances>. In negative situations, however, the subjects expected their <friends> empathetic reactions in negative situations. These findings show that friendship is not significant to preschool children in conflicting situations, but that it is significant to them in empathetic situations. In particular, when preschool children have negative feelings, the children expect their friends to have the same feelings.

Key words: prediction of other's emotional reactions, conflict, empathy, friends, preschoolers

問 題

現在、多くの社会的認知に関する研究において、子どもの社会的行動が、知覚・認知過程や子どもの社会的手がかりの解釈によって媒介される(例えば、Dodge, Pettit, McClasky, & Brown, 1986)ということが明らかにされている。子どもは、社会的手がかりの解釈によって、他者の行動予測による社会的世界の統制、自分の行動の統制、社会的相互作用の制御をすることが可能となる(Erwin, 1993)。この子どもの仲間関係に関わる社会的認知研究は、いくつかの側面に分けることができる。例えば、共感性・役割取得、特定の他者の人格特性の理解、他者の行動の原因帰属・意図解釈などである。子どもの友だち関係の理解は、その中の1つの側面と位置づけることができるだろう。

特定の状況で相手がどのような情動反応をするか

と予測できることは、友だち関係を築く上で重要な役割を果たすと考えられる。つまり、ある状況で相手がとった行動にどのような意味があったかを適切に判断できることは、相手との関係を築くために重要となる。けれども、実際の相互作用中では多くの場合行動とともに何らかの情動反応が示されており、それ自体が重要な手がかりとなりうる。また、場合によっては、行動以前に情動反応として示された手がかりが、相手を推測するために必要となることもある。Erwin(1993)は、共感性や適切な役割取得能力を持つことが友だち関係を築く上で重要であり、また他者の意図を適切に帰属させそれに応じた反応ができることが友だち関係を持続させるために必要であると示唆している。そこで本研究では、幼児が情動的側面で友だちの特性をどのように理解しているのか検討することを目的とする。

他者の情動予測に関する研究のなかで、朝生

(1987), Gneppら (Gnepp, 1983; 1989; Gnepp & Gould, 1982; Gnepp, Klayman, & Trabasso, 1982) などの研究を概観してみると、年長頃になると幼児もある程度他者についての情報を考慮してその人物の情動予測ができるようになるといえる。また、原 (1994) では、あるポジティブな状況にいる登場人物がポジティブ (もしくはネガティブ) な行動特性を持った人物に出会ったときに状況とともに出会った人物についての情報も考慮して年長児が情動予測している可能性があることが示唆されている。しかしながら、幼児が他者の内的特性を考慮して行動予測を行うことはある程度できる (Heller & Berndt, 1981) もの、行動予測と情動予測を比較すると年少の子どもにとっては情動予測の方が困難であるという結果も示されている (Gnepp & Chilamkurti, 1988)。

原 (1995) は、年長児に対して遊び、援助、信頼の3つの構成場面で友だちと知ってる子に対する行動予測を行わせている。その結果、遊び場面と援助場面で知ってる子と比較すると友だちに対して好意的に振る舞ってくるだろうと予測していることが示されている。この結果は、幼児が友だちに対して好意的な行動特性を期待していることを示しているといえる。もし幼児が行動特性と同様に情動特性に対しても友だちに対する特定の期待を形成しているならば、知ってる子と比べるとより好意的な予測をされると考えられる。

ところで、これまで感情予測の研究で使用されている情動予測場面は、ポジティブな場面かネガティブな場面かというような大まかな分類基準しか設定されていない場合が多い。実際、1つの要因計画の中で社会的場面と非社会的場面が含まれていたりする場合もある。原 (1997) は、この点を考慮するために、場面による年長児の情動予測パターンの変化について検討している。本研究では、ここで使用された葛藤場面と共感場面を情動予測場面として使用する。

方 法

1) 被験児 H市市内の私立幼稚園年長児29名 (女児17名, 男児12名, 平均月齢72.9カ月, 範囲67-79カ月)。

2) 子どものペアリング ペアリングは、原 (1995) の方法を参考とした。まず、被験児に同性の同じクラスの子どもの中で最も仲の良い友だちを3名指名

させ、その後、被験児に同性の同じクラスの子どものを“とても仲良しの子”, “普通に仲良しの子”, “あまり仲良しではない子”の3つのグループに分けさせた。

<友だち条件> 相互に仲の良い友だちとして相手を指名しており、且つ互いに相手を“とても仲良しの子”のグループに入れている二人組。

<知ってる子条件> 共に相手を仲の良い友だちとして指名しておらず、且つ互いに相手を“あまり仲良しではない子”のグループに入れている二人組。

また、被験児AとBが友だち条件としてペアにされた場合、AとBが同時に知ってる子条件をみたすCをAとBの知ってる子条件のペアの相手とした。

さらに原 (1995) で行われたように、ある特定の子どもの行動特性が結果に影響する可能性を少なくするために以下の条件を満たすようにペアの相手を選考した。(1) 被験児AとBが友だち条件としてペアにされた場合、AとBはそれ以外の子どもの友だち条件の相手として選ばれない、(2) AとBが同時に知ってる子条件をみたすCをAとBの知ってる子条件のペアの相手とする、(3) CはAとB以外の子どもの知ってる子条件の相手として選ばれない、以上の3つである。

以上のような操作的定義の基に本実験は行われた。なお、本実験の中では操作的に定義された友だち及び知ってる子それぞれを<友だち>と<知ってる子>と以下表記することとする。

3) 構成場面 情動予測及び情動判断させる構成場面は葛藤場面と共感場面の2つの構成場面からなっていた (Table 1参照)。まず葛藤場面は、Aが敵意を持ってもしくはアクシデントで起こした社会的問題場面に直面したBの情動反応の予測をさせる場面 (例、Aが悪戯しようと思って [もしくは偶然ぶつかって] Bが作った積木を壊した) であった。情動予測させる場面は、アクシデントと敵意それぞれ3場面を作成した。次に共感場面は、登場人物Aのポジティブもしくはネガティブな社会的状況をみた登場人物Bの情動反応の予測させる場面 (例、Aが自分の描いた絵を他の子からからかわれている [もしくはほめられている] ところをBがみる) であった。情動予測させる場面はポジティブとネガティブそれぞれ3場面を作成した。

4) 情動予測場面 情動予測場面を表す絵を提示しながら、情動予測質問をおこなった。幼児が友だち関係を理解しているかどうかを検討するためには、その他の関係 (ここでは知人関係) と比較して友だち

Table 1 葛藤場面・共感場面における各場面状況

Situations		Events
Conflictiong	Accident	Xが偶然ぶつかってYの積木を壊す Xが偶然ころんでYの砂山を壊す Xが偶然ぶつかってお茶をYにかける
	Hostility	Xが悪戯しようと思ってYの積木を壊す Xが悪戯しようと思ってYの砂山を壊す Xが悪戯しようと思ってお茶をYにかける
Empathetic	Positive	Xが自分が描いた絵をほめられているところをYが見る Xが着ている服をほめられているところをYが見る Xが折り紙の折り方をほめられているところをYが見る
	Negative	Xが自分が描いた絵をからかわれているところをYが見る Xが着ている服をからかわれてところをYが見る Xが折り紙の折り方をからかわれているところをYが見る

関係の特異的なものであると理解しているかどうかを検討する必要がある (Erwin, 1993)。そこで本研究で情動予測させた内容は、Aが本人でBが<友だち>である場合 (情動予測1) と、Aが本人でBが<知ってる子>である場合 (情動予測2) と、Aが<知ってる子>でBが<友だち>である場合 (情動予測3) の3タイプであった。

葛藤場面 反応は、怒った顔、悲しい顔の2つの顔の中から選択させ、選択したどの程度その顔をしていると思うかそれぞれ大・中・小の3つの円から選択することで3段階評定 (とても怒った顔-3-3ととても悲しい顔) させ、情動予測得点とした。

共感場面 反応は、楽しい顔と悲しい顔の2つの顔の中から選択させ、選択したどの程度その顔をしていると思うかそれぞれ大・中・小の3つの円から選択させることで3段階評定 (とても悲しい顔-3-3ととても楽しい顔) させ情動予測得点とした。

5) 手続き 個別面接法で行った。まず、B4サイズの画用紙に描かれたその場面を示す絵を提示しながら一般的情動予測質問を行った。反応は、その時の登場人物の顔に最も当てはまると思う顔を直径7cmの円の中に描かれた表情カードから葛藤場面では怒った顔と悲しい顔、共感場面では笑った顔と悲しい顔から選択させることによって求めた。本研究で使用した表情カードは原 (1994) で使用されたものと同じものであり5、6歳児のほとんどがその表情を示していると認知することができていたものであった。また、どれぐらいその顔をすと思うかを大 (直径8.5cm)・中 (直径7cm)・小 (直径5.5cm) と並んだ3つの円の中から1つを選択させることで3段階

評定 (とても3-1あまり) させた。各場面の提示順序はカウンターバランスを行った。また、評定用の大・中・小の円の並ぶ左右の方向はカウンターバランスを行った。

原 (1997) では、子どもに情動予測させる際、笑った顔、怒った顔、悲しい顔の3つの中から1つを選択させる方法を使用していた。しかしながら、原の結果において、実際の仲間に対する情動予測を行わせた場合、(1) 葛藤場面ではアクシデント場面及び敵意場面ともに笑った顔の選択がほとんど見られない、(2) 共感場面はポジティブ場面では笑った顔の選択が多く、ネガティブ場面では怒った顔と悲しい顔の選択が多い、(3) ただしネガティブ場面で怒った顔を選択する子どもは登場人物に共感的に情動予測しているというよりも、もう一人の登場人物に対する情動表出を示している可能性があることが示されている。また、Dozier (1991) は、子どもに内的特性から行動予測を行わせる場合、二者択一的判断をよりも量的判断に求めた方が内的特性を反映した行動予測を行いやすいことを明らかにしている。以上の点を考慮し、本研究では葛藤場面では怒った顔と悲しい顔、共感場面では笑った顔と悲しい顔の両極性の評定による情動予測を行わせることとした。

結 果

ベアリングの基準を満たし、且つ情動予測において不備のなかった21名 (72.4%) を以下の分析の対象とした。この割合は一般的なものであった。各場面における平均情動予測得点を Table 2 に示す。

Table 2 葛藤場面・共感場面における情動予測1・2・3の平均得点

Situations		Prediction 1 Mean (SD)	Prediction 2 Mean (SD)	Prediction 3 Mean (SD)
Conflicting	Accident	-0.05 (2.32)	1.00 (1.88)	0.33 (1.83)
	Hostility	-0.43 (2.50)	-0.33 (2.34)	0.24 (2.22)
Empathetic	Positive	1.67 (1.89)	1.05 (1.96)	1.19 (2.20)
	Negative	-1.48 (1.50)	-0.33 (1.96)	-1.05 (1.94)

Note 1. Prediction 1 is friends' emotional reactions toward selves.
 Note 2. Prediction 2 is acquaintances' emotional reactions toward selves.
 Note 3. Prediction 3 is friends' emotional reactions toward acquaintances.
 Note 4. Subjects rated emotional reactions from -3 (very angry) to 3 (very sad) in conflicting situations.
 Note 5. Subjects rated emotional reactions from -3 (very sad) to 3 (very happy) in empathetic situations.

1) 葛藤場面 自分に対する<友だち>と<知ってる子>の情動反応の予測 まず、葛藤場面で自分に対する<友だち>と<知ってる子>の情動反応に違いがあると考えているかどうか検討するために情動予測1と情動予測2の比較を行った。情動予測得点に対して2(場面:アクシデント・敵意)×2(相手:友だち・知ってる子)の分散分析を行った。その結果、場面の主効果($F(20,1)=4.74, p<.05$)のみが有意であった。このことから、アクシデント場面($M=.48$)よりも敵意場面($M=-.38$)ではより怒った顔をするだろうと子どもが予測していることが示された。

自分と<知ってる子>に対する<友だち>の情動反応の予測 次に、<友だち>の自分に対する情動反応と<知ってる子>に対する情動反応に違いがあると考えているかどうか検討するために情動予測1と情動予測3の比較を行った。情動予測得点に対して2(場面)×2(相手:自分・知ってる子)の分散分析を行った。その結果、場面の主効果及び交互作用効果は有意ではなかった。

2) 共感場面 自分に対する<友だち>と<知ってる子>の情動反応の予測 まず、共感場面で自分に対する

る<友だち>と<知ってる子>の情動反応に違いがあると考えているかどうか検討するために情動予測1と情動予測2の比較を行った。情動予測得点に対して2(場面:ポジティブ・ネガティブ)×2(相手:友だち・知ってる子)の分散分析を行った。その結果、場面の主効果($F(1,20)=20.31, p<.001$)と場面×相手交互作用効果($F(1,20)=6.40, p<.01$)が有意であった。交互作用効果に対して単純主効果の検定を行ったところ、<友だち>における場面の単純主効果($F(1,40)=26.6, p<.001$)、<知ってる子>における場面の単純主効果($F(1,20)=5.11, p<.05$)及びネガティブ場面における相手の単純主効果($F(1,20)=5.55, p<.05$)が有意であった。よって、ネガティブ場面において<友だち>($M=-1.48$)は<知ってる子>($M=-.33$)よりも悲しい顔をするだろうと予測していることが示された。また、場面の主効果も有意であったがこれは単純に場面の違いを反映した結果であり、この結果については特に取り扱わない。共感場面における<友だち>と<知ってる子>における平均情動予測得点をFigure 1.に示す。

自分と<知ってる子>に対する<友だち>の情動反

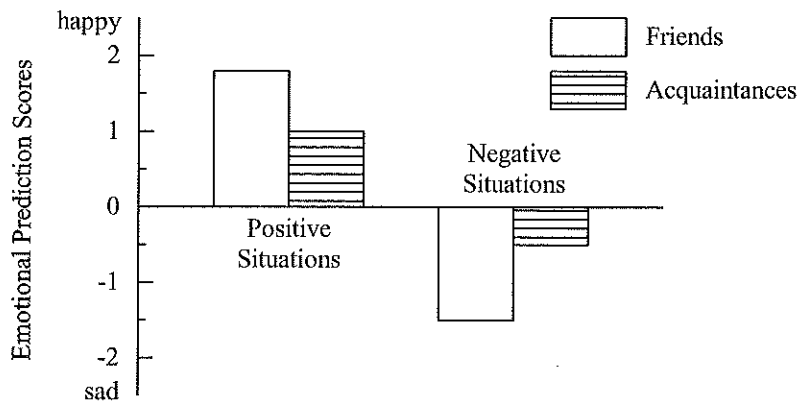


Figure 1. 共感場面における友だちと知っている子の自分に対する情動予測

応の予測 次に、〈友だち〉の自分に対する情動反応と〈知ってる子〉に対する情動反応に違いがあると考えているかどうか検討するために情動予測1と情動予測3の比較を行った。情動予測得点に対して2(場面)×2(相手:自分・知ってる子)の分散分析を行った。その結果、場面の主効果($F(1,20)=27.83, p<.001$)のみが有意であった。ただし、自分に対する〈友だち〉と〈知ってる子〉の情動予測と同様にこの結果は単純に場面の違いを反映したものであるのでここではあえてこの結果について取り扱わない。

考 察

1) 自分に対する〈友だち〉と〈知ってる子〉の情動反応の予測 まず、葛藤場面における〈友だち〉と〈知ってる子〉に対する幼児の期待に差がみられないことが示された。これに対して、共感場面においてはネガティブ場面で〈友だち〉は〈知ってる子〉よりも自分がネガティブな状況にあるときに、同じくネガティブな気持ちになってくれるだろうと期待していることが示された。すでに行動予測において幼児が友だちと知ってる子に対する期待が異なることが示されている(原, 1995)。しかし、Gnepp & Chilamkurti (1988) が示しているように幼児にとっては特定の人格特性から情動予測を行うことは行動予測を行うよりも困難であるかもしれないことが示唆されていた。けれども、本研究の結果は、葛藤場面では友だちということが特徴的な情動反応を予測させる人格特性を持つことと関係していないが、共感場面特にネガティブ場面において友だちが特徴的な情動反応を予測させる人格特性となっていることを示す結果であった。このことから、年長児にも人格特性から情動反応を予測させるような特徴的な場面が存在している可能性が示唆されたといえる。

葛藤場面と共感場面の違いについては、本研究は葛藤場面と共感場面の測度が異なっているために直

接的な比較ができないけれども、この結果は同一人物の特定の他者に対する情動予測から得られた結果であった。つまり、幼児が葛藤場面は特定の人格特性よりも場面状況の特徴(アクシデントか敵意があったか)を考慮すべき場面であり、逆に共感場面は特定の人格特性(友だちか知ってる子か)を考慮すべき場面であるという知識を持っていることを示唆する結果であると考えられる。Yuill (1993) は、状態が一時的で外的原因によって引き起こされるものであり、特性が時間的・状況的に一貫しており内的原因に帰属されるものと規定している。そして、このYuill (1993) の主張を受けてLight (1993) は、人間の行動の予測や説明にはこの心的状態に関する知識体系である‘心の理論’だけでは不十分であり、内的特性に関する知識体系である‘人格についての理論’について研究していく必要があることを述べている。本研究の結果は、年長児が場面によってこの状態に対する知識体系と特性に対する知識体系を使い分けていることを示す結果であるといえる。

2) 自分と〈知ってる子〉に対する〈友だち〉の情動反応の予測 自分と〈知ってる子〉に対する〈友だち〉の情動反応の予測においては、葛藤場面及び共感場面ともに明確な差異はみだされなかった。この結果について1つの解釈としては、幼児は友だちの情動特性を特定の場面状況に付随して特徴的にみられるものであり、反応する相手が誰であるかによって違いがみられないと理解しているためというのが考えられる。また別の解釈としては、この課題が特定の場面の状況もしくは友だちの人格特性を考慮しつつ、その友だちが自分もしくは知ってる子の人格特性を考慮して情動予測しなければならないものであったため、幼児にとっては非常に困難な課題であったため違いがみられなかったというものが考えられる。この点については、本研究の結果からのみでははっきりとした結論を下すことはできず、今後検討していく必要があると思われる。

引用文献

- 朝生あけみ：幼児期における他者感情の推測能力の発達-利用情報の変化-, 教育心理学研究, 35, 33-40 (1987)
- Dodge, K.A., Pettit, G.S., McClasky, C.L., & Brown, M.M.: Social competence in children. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 51, (2, serial No. 213) (1986)
- Dodge, A., Schlundt, D.C., Shoken, L., & Delugach, J.D.: Social competence and children's sociometric status: The role of peer group entry strategies. *Merill-Palmer Quarterly*, 29, 309-336 (1983)
- Dozier, M.: Functional measurement assessment of young children's ability to predict future behavior. *Child Development*, 62, 1091-1099 (1991)
- Erwin, P.: *Friendship and Peer Relations in Children*.

- Chichester: John Wiley & Sons (1993)
- Gnepp, J.: Children's social sensitivity: Inferring emotions from conflicting cues. *Developmental Psychology*, **19**, 805-814 (1983)
- Gnepp, J.: Personalized Inferences of emotions and appraisals: Component processes and correlates. *Developmental Psychology*, **25**, 277-288 (1989)
- Gnepp, J., & Chilamkurti, C.: Children's use of personality attributions to predict other people's emotional and behavioral reactions. *Child Development*, **59**, 743-754 (1988)
- Gnepp, J., & Gould, M.E.: The development of personalized inferences: Understanding other people's emotional reactions in light of their prior experiences. *Child Development*, **56**, 1455-1464 (1982)
- Gnepp, J., Klayman, J., & Trabasso, T.: A hierarchy of information sources inferring emotional reactions. *Journal of Experimental Child Psychology*, **33**, 111-123 (1982)
- 原 孝成: 幼児の他者感情予測に及ぼす状況情報の効果 広島大学教育学部紀要第1部 (心理学), **43**, 233-239 (1994)
- 原 孝成: 幼児における友だちの行動特性の理解—友だちの行動予測と意図— 心理学研究, **65**, 419-427 (1995)
- 原 孝成: 葛藤場面と共感場面における幼児の情動予測の査定 幼年教育年報, **19**, 51-57 (1997)
- Heller, K.A., & Berndt, T.J.: Developmental changes in the formation and organization of personality attribution. *Child Development*, **52**, 683-691 (1981)
- 久保ゆかり・無藤 隆: 気持ちの理解における類似経験の想起の効果—共感的理解の発展的検討— 教育心理学研究, **32**, 296-305 (1984)
- Light, P.: Developing psychologies. In M. Bennett (Ed.). *The Child as Psychologist: An Introduction to The Development of Social Cognition*. New York London Toronto Sydney Tokyo Singapore: Harvester Wheatsheaf. Pp.191-200 (1993)
- Underwood, M.K., Coie, J.D., & Herbman, C.R.: Display rules for anger and aggression in school-age children. *Child Development*, **63**, 366-380 (1992)
- Yuill, N.: Understanding of Personality and Dispositions. In M. Bennett (Ed.). *The Child as Psychologist: An Introduction to The Development of Social Cognition*. New York London Toronto Sydney Tokyo Singapore: Harvester Wheatsheaf. Pp.87-110 (1993)
- Yuill, N., & Perner, J.: Intentionality and knowledge in children's judgments of actor's responsibility and responsibility and recipient's emotional reaction. *Developmental Psychology*, **29**, 611-621 (1988)